

# キハダ 中西部太平洋

## Yellowfin Tuna, *Thunnus albacares*

### 管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会(WCPFC)

### 最近一年間の動き

2005年には、まき網の漁獲量が1999年以降最高であったにもかかわらず、インドネシアおよびフィリピンの漁獲量の減少により、その漁獲量は2004年より若干多い423,467トンに留まった。

### 生物学的特性

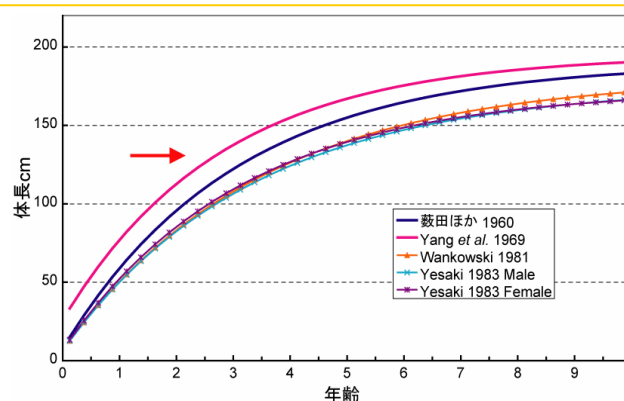
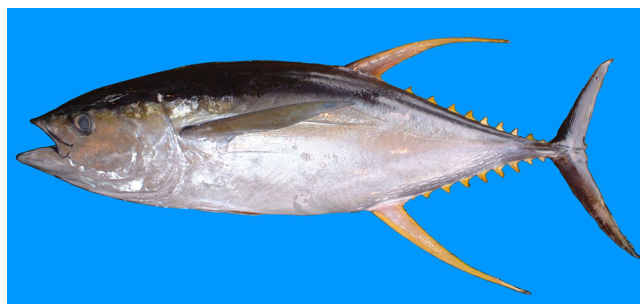
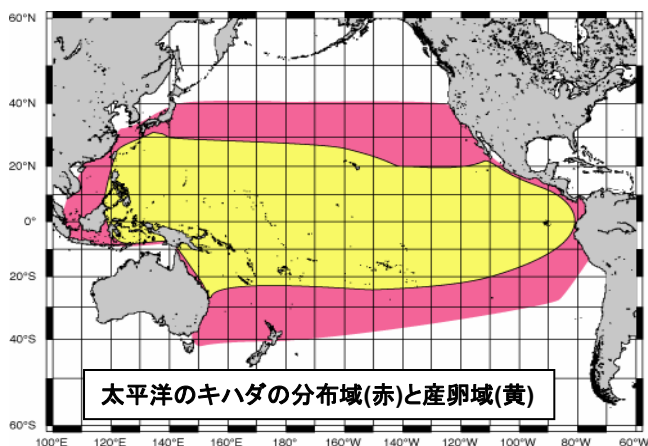
- 寿命: 7~10 歳
- 成熟開始年齢: 3 歳
- 産卵期・産卵場: 周年・表面水温 24℃以上の海域
- 索餌場: 分布域に等しい
- 食性: 魚類・甲殻類・頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

### 利用・用途

刺身、缶詰、練り製品の原料

### 漁業の特徴

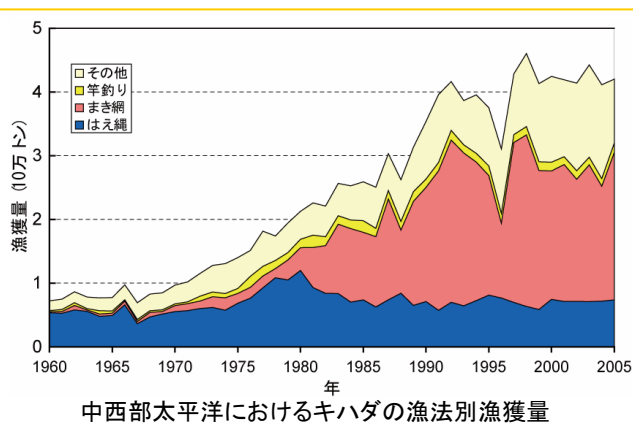
本資源の主要な漁業は大洋のやや深い水深帯(100~250 m)の魚群が対象のはえ縄と、表層付近の魚群が対象のまき網・竿釣りである。従来は、はえ縄の漁獲が大勢を占めたが、1980年代からまき網漁業が熱帯水域で発達し、その漁獲量は他漁業を遥かに凌駕した。フィリピン・インドネシアでは小型まき網、ひき網、竿釣り、手釣りなど漁業が小規模かつ多様で、漁獲量も大きく、増加傾向にある。



中西部太平洋のキハダの年齢と成長  
矢印はほぼ全ての個体が成熟する体長(120cm)

### 漁獲の動向

本資源のはえ縄漁業は1950年代初頭にキハダを主な対象種として発展し、1970年代半ばにその主な対象をメバチに換えた。本資源の大規模な産業的まき網漁業は1980年代初めに、カツオを主要な対象種としつつ多くのキハダも漁獲する漁業として発達した。まき網漁業の発展は、インドネシアとフィリピンによる漁獲の増加と相まって、1980年から1990年の間に中西部太平洋でのキハダの漁獲を20万トンから40万トンへと倍増させた。この10年、年間の漁獲の40~60%はまき網で漁獲されている。



## 資源状態

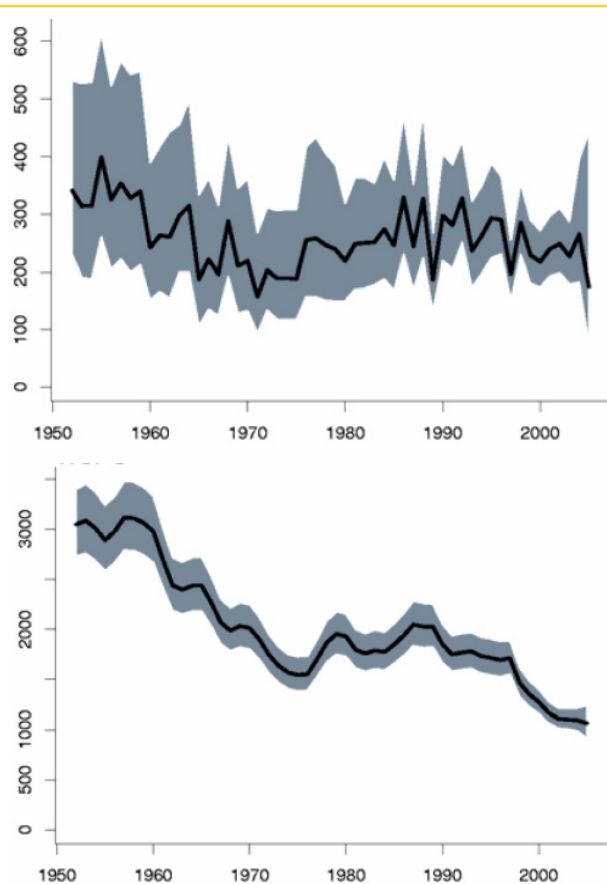
2006年の資源評価のすべての解析結果において、現在の資源量はMSYをもたらす資源量を上回っており、WCPOにおけるキハダ資源は、乱獲状態にはない、と思われる。しかしながら、増加する漁獲死亡によって資源量は近年減少傾向にあり、注意深くモニタリングすることが必要である。今回の結果の $B_{current} / B_{MSY}$ は 1.17-1.27 (base case: 1.17) であり、2005年の解析(0.88-1.55, base case: 1.32)とほぼ同程度の値である。

## 管理方策

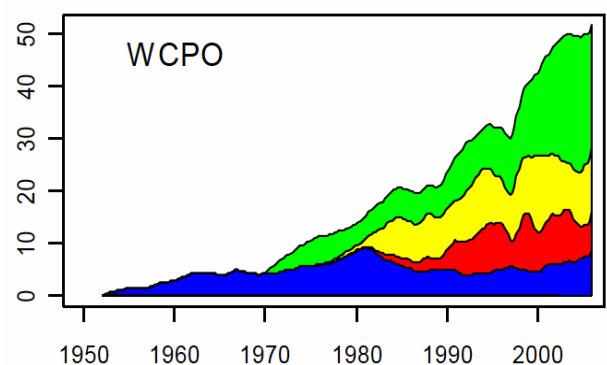
- 北緯20度以北、南緯20度以南の国のメバチ・キハダを対象とする漁船(はえ縄を除く)の隻数総漁獲能力を近年レベルに抑制する。
- 北緯20度～南緯20度の公海におけるまき網漁業の漁獲努力量を近年レベルに抑制する。
- まき網漁業による小型魚の投棄を防止するため、漁獲物の全量保持を推進する。
- はえ縄漁業については、2006年から3年間で、漁獲量を近年レベルに抑制する昨年の決議を維持する。

## 資源評価まとめ

- WCPFC からの委託により、SPC(南太平洋委員会)のOFP(Oceanic Fisheries Programme)が実施
- 統合モデルであるMULTIFAN-CLにより評価
- 資源水準は中位で横ばい



MULTIFAN-CLで推定した加入量(上)と総資源量の傾向(千トン、影の部分は95%信頼限界)(Hampton et al. 2006)



MULTIFAN-CLで推定した各漁業の本資源への影響  
縦軸は漁業が資源を減少させた割合(%)を示したもの。はえ縄(青)、まき網素群れ(赤)、まき網流れ物操業(黄)、フィリピン・インドネシアの漁業(緑)

## キハダ(中西部太平洋)の資源の現況(要約表)

資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近5年)	41.1~44.2 万トン 平均:42.1 万トン
我が国の漁獲量 (最近5年)	4.1~5.8 万トン 平均:4.8 万トン